

## 常滑市議会 総務委員会 視察報告

### 1 視察期日

令和5年7月3日（月）～7月4日（火）まで（1泊2日）

### 2 視察先及び調査項目

#### （1）福岡県八女市

「予約型乗合タクシー「ふる里タクシー」について」

#### （2）福岡県福津市

「SDGs未来都市について」

### 3 参加委員

委員長 加藤 代史子      副委員長 西本 真樹  
委員 中村 崇春、伊藤 史郎、加藤 久豊  
（オンライン参加委員） 宇佐美 美穂

### 4 随行

議事課主任 瀬木 健太

### 5 視察内容

#### （1）福岡県八女市「予約型乗合タクシー「ふる里タクシー」について」

八女市は福岡県の南部、福岡市から南へ約50キロメートルに位置し、北は久留米市、広川町、西は筑後市、南は熊本県、東は大分県に接している。面積は39.34平方キロメートルから平成22年の近隣2町2村との合併後482.44平方キロメートルとなり、総面積は県内2位となった。中南部は平野、北東部は森林で占められている中核都市である。市の中央部を国道3号線が南北に、国道442号が東西に走り、西端には九州縦貫自動車道が通じ、八女インターチェンジがある。豊かな大地に生まれ、古代から栄え、八女丘陵には岩戸山古墳をはじめ多くの古墳があり、また、手すき和紙・仏壇・提灯などの伝統工芸品や茶・電照菊・椎茸などの農産物がある。

八女市では予約型乗合タクシー「ふる里タクシー」についての説明があった。

「ふる里タクシー」とは予約があったときに、予約があった区間だけを運行し、複数の利用者が乗り合いで利用するタクシーであり、利用者の玄関から目的地の玄関まで送迎するとのこと。事業の目的としては、広大な山間地域を抱え、全国平均を大きく上回る高齢化（36.2%：R4.3住基人口61,788人、65歳以上22,222人）が進む中、定住自立圏構想の柱の一つである地域公共交通の維持・

確保を図るため、既存の路線バス、患者輸送車、福祉バス等の地域生活交通を抜本的に見直し、デマンド交通を導入することにより、新しい交通システムを活用し、市内に点在していた交通空白地域の解消を図り、安全・安心のまちづくりを支えていくことである。

今後の取組として平成 24 年度から本格運行に移行したが、エリア超え、運行日、運行時間など、「乗合タクシーの運行ルール」や「路線バスとの連携」等の課題は多く残っており、今後とも、市民に末永く親しまれる公共交通機関となることを目指し、改善をすすめていくとのこと。

## **(ア) 個人の所感**

### **加藤 代史子委員長**

八女市は 2 町 2 村の合併により 482.44 平方キロメートルの広大な山間地域を抱え、高齢化率 36.2% で高齢者の地域公共交通の維持・確保が必要で導入された。八女市での予約型乗り合いタクシーは H24 年度から本格運行され、市内 11 エリア内の移動を平日 8 便のみ、16 台の 10 人乗りワゴン型タクシーで運行されている。予約受付、配車管理を社会福祉協議会が行い、車両は各事業者からの借り上げ運行で実施されている。説明を受けやはり、課題は使っている人が限定的で、特に男性の利用者が少ない。女性高齢者は免許取得率が低く、利用につながっている。男性は高齢者になっても地域内は運転し、免許の返納が遅い。山間地域であり移動にはやはり車が欠かせない。乗り合いであるため、自分の行きたいところだけにいくのではなく、到着時間に差ができてしまうのも男性に不向きなのだろう。乗らず嫌いの方もあり、多くの方に利用してほしいのが課題であり、地域に出向き説明したり、無料券を配布し乗っていただく工夫も実施している。予約方法が「電話」のみで、高齢者へのスマホ予約の移行は難しい。「電話」での予約は運営している社会福祉協議会が行っているが、乗車の順序など、地域、利用者を熟知していないと大変難しい業務である。「電話」予約センターを見学させていただいたが、地域のお店、病院、銀行などいろいろな情報が貼りだされていた。電話予約であり、間違い等も起こりうる状況であり、大変ご苦労されている。市域が広大でエリア内だけでの移動では難しい場所もあり、エリア越えもできるようになっているが、今後 11 のエリアの移動について、また幹線バスとの乗り継ぎなどの課題解消も大変であると思う。この様な山間地域では今後、自動運転などが求められていくと思うが、「電話」予約からの移行も大変困難な問題である。しかし、実際に利用している高齢者の方々にとっては、生活になくはない地域交通であり、今後加速する高齢化率を考えると今後も必要な仕組みであった。

## **西本 真樹副委員長**

平成 22 年に 2 町 2 村と合併したことにより、482 平方キロメートルという福岡県で 2 番目の面積を有する市であった。旧市町や地域の特性を生かし、合併前の 5 中学校区に 1 時間以内で移動できるように 11 エリアに分けて運行していることに、小回りがきくような配慮がうかがえた。

オペレーター 4 人で 11 エリアのタクシー予約に対応しており、市内の診療所や商業施設、公的施設などの状況を把握していることは、大変な作業だと思った。しかし、利用する側からみれば、予約以外の施設の状況も対応して（答えて）もらえるので、高齢者の方にとってはオペレーターが対応してくれるのは、安心を生み出すと思った。

## **宇佐美 美穂委員**

八女市は広大な山間地域を抱え、高齢化も進む中、その地形図からも常滑市よりもさらに市民の足となる交通網には苦慮してきたことが伺える。地域公共交通網の抜本的な見直しにより、交通空白地域を解消するための取組の中で、考え方として交通網を「線から面へ」と捉える中で、予約型乗合タクシー「ふる里タクシー」を導入した。タクシー会社の車両（16 台）と運転手を、市が平日の午前 7 時 30 分～午後 3 時 30 分まで借り上げている。利用者は事前登録制、前日までの電話予約にて受け付けている。市内を 11 エリアに分け、エリア内移動を原則に平日のみ、一日 8 便の運行としている。利用料金は、誰でもこれくらいであれば払えるユニバーサル金額として片道 300 円とし、値下げや減免は今のところ考えていないとのこと。国土交通省所管事業の実証運行として始まり、平成 24 年度から本格運行へ移行しており、利用人数は一日約 158 名、年間 37,937 人程度であるとのこと。

制度の普及にあたり苦労した点として、この制度を知ってもらい利用してみてもらおう、ということがあったとのことである。その工夫点は、70 歳以上高齢者の運転免許返納の際に、八女市タクシー・路線バス共通回数券 6 万円分の交付の他「乗りたいけれど乗り方がわからない」という方に対する説明や、高齢の親がいる中年世代へ「高齢の親御さんに買い物に連れて行ってと頼まれたりするのは大変だよ。こんなタクシーがあるから、予約してあげてみて。」と声かけをするなど、地道な努力を重ねてこられたことである。また、課題として、運転手の確保、利用者の方がタクシーからバスへの乗り継ぎにより移動できる範囲が広がることへの理解が得られにくいことが挙げられた。

## **中村 崇春委員**

広大な市域全体をカバーするための施策で、基幹バスが線で地域を繋ぎ、「ふる里タクシー」が面でそれ以外を補完する。その役割を十分に果たしていると感じた。平成 21～23 年度の実証運行、平成 24 年度からの本格運行という長年の事業により、これまでの課題にしっかりと対策しているようで、大変参考になった。コミュニティバスグルーンが開始したばかりの本市にとって、隙間を埋める交通手段と感じた。

## **伊藤 史郎委員**

八女市で、乗合いタクシー事業について学んできた。PR 方法や利用者増加などに課題もあるようだが、市民にとってはとても大切な地域の足であると認識した。とても参考になる事業であると感じた。

## **加藤 久豊委員**

公共交通のあり方についてとても参考になる事業を聞くことができた。八女市には鉄道がないため、移動手段は限られている。市民にとって利用しやすい制度であると感じた。

### **(イ) 常滑市への反映**

## **加藤 代史子委員長**

現在行われている、地域公共交通協議会も今年度にはある程度の形になると思っている。昨年からの走行の始まったコミュニティバスグルーンもバス停の在り方、ルートでの在り方も市民の皆さんから、改善が求められている。しかしこれからの IT サービス等を考えると、より多くの高齢者の皆さんへのスマホ教室が必要であろう。より便利に使っていただく工夫も重要である。高齢者が移動することは、健康寿命にもつながり、生きがいにもなる。買い物も必要。市域の地形を考えると、バス亭までの足も何か必要だと思っている。八女市のような「デマンドタクシー」も地域によっては必要。地域のお助け隊による支援も始まっているが、地域間での格差が今後も増えていく。よい事例が他の地域でも実施できるよう、市民協働としての広がりが重要であると考えている。そのために行政が何を担う必要があるのか、全ての市民の皆様に喜んでもらうのは困難でも、よりベターな地域公共交通を常滑市としても考えていかなければならないと考える。

## **西本 真樹副委員長**

本市ではコミュニティバスグルーンと名鉄が南北に路線があるが、東側に住む人が多いため公共交通網の充実を考えると 10 人乗り程度のワンボックス車が

ドアツードアで回ることがよいと思う。八女市では事前アンケートを病院、学校、商業施設、バス利用者等のアンケートをおこない、課題を整理してきたとの話があり、きめ細かい事前アンケートの実施は必要と思った。

### **宇佐美 美穂委員**

本市において、今あるコミュニティバスグルーンのさらなる利便性を高める努力を続けると共に、八女市と同じような交通空白地域の存在や、交通網を「線から面へ」と拡充する必要がある中で、八女市の「ふる里タクシー」のような制度を取り入れることは、減少傾向にある人口と今後の交通網整備の費用対効果を鑑みたときに、その一助となり得る。八女市において課題となっている運転手の確保について、一般的にはタクシー会社が出す二種免許取得支援補助金を市が出すという方法も検討できるのではないか。

### **中村 崇春委員**

コミュニティバスグルーンが開始したばかりの本市にとって、地域や時間帯などの隙間を埋める交通手段であり、導入を前提とした検討を進めてほしい。

八女市では、平成20年に地域公共交通協議会が設立している。昨年度に立ち上がった本市の協議会の役割は大きく、八女市での取組も参考にしてもらいたい。また、八女市でのデマンド交通の予算は年間1億円ほどであり、市域では8分の1以下である本市では、同等の予算で八女市以上のサービスが提供できると考える。是非とも調査研究を進めてもらいたい。

### **伊藤 史郎委員**

鉄道駅やバス停まで遠い市民にどのように利用しやすい公共交通にしていくかが、課題としてある。今回視察した乗り合いタクシーなどの考え方も一つの考えであると感じた。特にドアツードアは親切だと感じた。市民の意見を聞きながら常滑市の公共交通に生かしていきたい。

### **加藤 久豊委員**

常滑市にはコミュニティバスグルーンがあるが、今後は地域公共交通の中でバス停までの距離など課題も多い。各中学校区において、こうした乗り合いタクシー制度を含め、バスセンターのような拠点整備もあるといいと感じた。



## （２）福岡県福津市「SDGs未来都市について」

福間町と津屋崎町の合併により、2005年1月24日に誕生し、19年目となった。福岡市と北九州市駅のほぼ中間に位置し、両都市への住宅供給地をして発展した。福間駅から博多駅までの鹿児島本線で約23分、国道3号線、九州道へのアクセスも良好である。総延長22キロメートルの白砂青松の海岸、干潟、山、河川などの豊かな自然環境である。アカウミガメの産卵やクロマツヘラサギなどの絶滅危惧種も訪れる。市内3か所の産地直売所では、新鮮な農産物や魚介類が購入できる。世界文化遺産である新原・奴山古墳群、津屋崎千軒の歴史的な街並み、宮地地嶽神社、海沿いカフェ、マリンスポーツなどの観光資源も豊富である。福間駅東土地地区画整理事業やサンピア福岡跡地の開発により、2015年から2020年にかけて人口増加率は14%で、全国6位である。

福津市は2019年7月に「SDGs未来都市」として選定され、「福津市第2期SDGs未来都市計画(2022~2024)」を元に様々な活動を行っている市である。

その一つとして「福津市未来共創センター(キッカケラボ)」があり、新しいかたちのまちづくりを創り出すプラットホーム(中間支援機能)となる公設民営の施設で、市民のボランティア活動を支援する場として活用していた「福津市ボランティアセンター」に、福津市がSDGs未来都市として取り組む「福津市SDGs未来都市計画」や市民の手によって生まれた「幸せのまちづくりラボ実施方針」などから生まれた思いやノウハウを機能統合するかたちで、令和4年に開

設された。産学官民の多様な主体が参画し、市民共働・公民連携のつながりが広がることで、持続可能なまちづくりの実現を目指している。また、人財育成を目的とした「BA-SCHOOL」などの活動についての説明を聞いた。

### **(ア) 個人の所感**

#### **加藤 代史子委員長**

福津市は「SDGs 未来都市」として 2019 年選定された。これは経済・社会・環境の三側面の統合的取組により、新たな価値を創造する自治体である。現在は第 2 期 SDGs 未来都市計画 (2022~2024) により推進されている。そして「キッカケラボ」が 2022 年 7 月に誕生し、福津にかかわる皆さんがつながり合い、新たな可能性を創り出している。市民活動の場の提供である。団体だけではなく、個人にも働きかけ、「何をすればいいかわからない」といった方へのキッカケを提供してる。BA-SCHOOL という場づくりファシリテーター実践塾も行っている。ラボには多種多様な方が相談にみえ、中学校のボランティア部の方からの相談も。高校生、専門学生。企業の CSR (社会的責任), CSV (経済的価値、社会的価値の両立) 等。この方々をコネクターという方がコーディネートする。コネクターは実践塾から誕生。市民・行政・NPO 等が運営に関わっている。教育でも SDGs を学び、市民にも SDGs の学習の場を提供している。市全体で SDGs を推進していく牽引はその当時の副市長であったそうである。初めは職員も SDGs って「何」からはじまり、現在は基本構想や各基本計画と全てに関連されている。やはり先導者は重要な存在で、職員の意識も変わっている。今回の説明者は女性で、男性の課長が温かく見守る感じでとてもよかった。

2030 年目指してですが、2019 年で環境保全の取組へ参加・協力している市民の割合が 50.2% ととても高く、意識の高さは驚きだ。行政としても、市長をトップとし SDGs 未来都市推進本部を設置し、庁内各部署から幅広く選任した SDGs 推進委員が配置されている。

やはりトップダウンの推進本部の推進力はすごいと感じた。

#### **西本 真樹副委員長**

福岡市と北九州市の中間地点にある自治体で、人口も 2008 年から 15 年間で約 1 万 3 千人も増加している。しかし、辺縁部では高齢化が進んでいる。

自然環境は、総延長 22 キロメートルの白砂青松の海岸や干潟、山、河川があり、実滅危惧種のアオウミガメやクロツラヘラサギなどが訪れたり、農産物や海産物などもあるが、保全活動などの意識が低い。

地域を担う人材育成や共同による環境保全・創造、地域経済の基盤の確立など、持続可能なまちづくりをどのようにしていくのかを市民、事業者、教育・研究機

関、市が連携しながら取り組まれていた。

福津市には、多くの人たちがまちづくりや市民活動を意識的におこなえる場所があると感じた。

### **宇佐美 美穂委員**

福津市は、総延長 22 キロメートルの遠浅の海岸など自然環境に恵まれ史跡や歴史的な街並みなどの観光資源が豊富な自治体である。SDGs が 2015 年 9 月に国際連合で採択されてからわずか 4 年でまちづくりの基本構想にその概念を取り入れ「人も自然も未来につながるまち、福津」とし、市民協働での持続可能なまちづくりに取り組んできた。今回の視察における資料、特に「福津市第 2 期 SDGs 未来都市計画 (2022~2024) は、細部まで非常によく内容が練られており、SDGs を軸にまち全体を豊かにする構想には驚かされる。特に興味深いのは、持続可能な社会を作るために「人」も持続可能である状態を目指すという観点である。慶応義塾大学大学院前野教授の研究による「人が幸せを感じる 5 つの因子」を柱とした各人の幸せ「風」の質問・地域の幸せ「土」の質問（「地域しあわせ風土スコア」）（同資料 P. 9~10）を取り入れ、その幸福度を上げる取組をするというアプローチが、各施策を市民に納得感を持って受け入れられ、また、イメージを共有しやすい結果となったのだと思われる。具体的な取組として、「人が幸せを感じる要因 5 つ」を満たし市民の幸福度を上げることに寄与しているのが、地域コミュニティ課 市民協働係管轄の「福津市未来共創センター キッカケラボ」である。福津市のまちを良くしたいという想いを持つ人同士をつなぎ、潜在的な人財を発掘、育て、地域のつながりやまちの活性化につなげる取組は非常に参考になる。中でも「BA - SCHOOL」は、対話とファシリテート技術を持つ人財を育成する取組であり、そこで育成した「場ファシリテーター」が様々な場で人と人を繋げるリーダーとして活躍することは、市民協働のまちづくりが持続可能であり続けるために役立つ取組である。

### **中村 崇春委員**

SDGs がまだ広く知られる前に、福津市元副市長の松田氏の指示により始まった取組は、先進自治体であることを十分に感じる内容であった。令和元年 9 月策定の「SDGs 未来都市計画」では経済への効果も計画していたが、令和 4 年 3 月策定の「第 2 期 SDGs 未来都市計画」では人づくりに重点を置いた内容で、福津に関わる市民の多様性や繋がりが大きく広がり、市職員もまちづくりは市民との協働であることを認識していた。女性職員もたいへん有能で元気もあり、職場の雰囲気もとても良いものであった。また、国の補助金等の利用に積極的に取り組んでおり、大変参考となる視察であった。



## **伊藤 史郎委員**

今回の視察を通して、より一層、持続可能な社会づくりは取り組んでいくべきだと強く感じた。

## **加藤 久豊委員**

前副市長の方針に伴い、持続可能な社会を作ろうと未来都市構想を計画し推進していた。地元の学校も巻き込みながら進めていく姿勢はとても参考になった。

### **(イ) 常滑市への反映**

## **加藤 代史子委員長**

本市のSDGsへの取組はどうか。本気度が感じられない。「誰一人取り残さない」これは全てのことに繋がっていく、大切な取組である。誰もが主役になれる。また誰もが何かで貢献したい、この思いをいかにコーディネートするのが重要だと思った。地域、学校に自分のできることで貢献する。その取りまとめをいかにするか。市民協働も含めて、市民への意識づけのために、何が必要か考えてほしい。本市でも市民協働の形が出来上がっている地域もある。これを地域の実情に合わせて進めていくこれがSDGsに繋がっていくと思う。

## **西本 真樹副委員長**

本市で、市民活動に参加をするときには、社会福祉協議会にボランティアセンターがあるが、さらに多くの市民が広く活動できる場が必要ではないかと感じた。福津市では、未来共創センター「キッカケラボ」をつくり、人と人との出会い・つながるキッカケを提供していた。そこで活動する人も、行政、NPO法人、市民と様々な立場の人がおり、市民活動の相談、参加、体験を提供していた。最初の導入は市がきっかけをつくらないといけないと思うが、関心を持つ人を取り込むことで、まちづくりや市民活動に参加する人たちが増えるのではないかと思う。

## **宇佐美 美穂委員**

福津市の自然環境（海や里山等）は常滑市とよく似ており、SDGsの観点を取り入れたまちづくりは参考になる部分は多い。遠浅の坂井海岸を、潮干狩り以外にSUPなどのマリンスポーツの拠点としたり、リゾート観光資源としての景観の整え方や環境保全の仕方は一考の余地があると思われる。一方で、強風による砂の飛散対策と景観保全のバランスを取るには地域住民の砂被害を考える

と難しい点もある。市民協働のつながりの場を市が提供し、市民協働が持続可能であり続けるための人財育成の場を設けている「キッカケラボ」については、本市でも取り入れることができる要素が多い。本市でも、市民から「何かまちづくりやボランティア活動をしたいが、横のつながり、人と出会うきっかけを探すのが難しい。」「協力したい個人、団体、業者などを検索できるアプリや、情報共有できるような仕組みが欲しい」という声を聞くことがある。また、福津市の「B A-SCHOOL」に「対話ファシリテーター」実践塾があるということだが、本市においても、個別の団体で「対話」についてのセミナーを開催している団体もあり、それまで個々に活動をしていた市民同士が出会う場を市が用意し、さらに、地域で活躍するリーダーとなる人財を市が育成することは、様々な活動が個人のみならず今後も長く続き、市民協働のまちづくりが活性化するきっかけとなる。今後検討する図書館を含む文化複合施設に、何を複合するかという議論に、この「キッカケラボ」のような施設を複合することを検討に入れていただきたい。

#### **中村 崇春委員**

現在、全国で当たり前のように話題となるSDGsだが、行政としてしっかりと利用してもらい、積極的に取り組んでももらいたい。本市の課題や計画に、SDGsを上手く取り込み、広報にも利用してもらいたい。国の補助金等を利用して、本市の予算以上の事業を積極的に検討してほしい。SDGsを活用しての地域力の向上は、本市の関係人口や訪問人口、移住人口の増加、地域経済の発展などに繋がるので、まずは人づくりから始めて、協働をしっかりと進めてもらいたい。来年度の市制70周年記念事業は、市民協働がキーワードになると思う。観光や次世代への継承など、SDGsの17のゴールに繋がる事業展開が可能と考える。上手に取り入れながら進めてほしい。

#### **伊藤 史郎委員**

担当する職員のやる気など伝わり刺激を受けた。常滑市においても持続可能な都市づくりのために、さらに進めていく必要があると感じた。同時に力強く推進する市の姿勢も重要と思う。こうした啓蒙活動を進めていきたい。

## **加藤 久豊委員**

市が未来都市に向け方針を打ち出し、多くの市民に浸透させ、輪を広げていくことが大切と改めて実感した。持続可能な社会づくりはこれからますます重要になると思う。ぜひ常滑市でも取り組んでいきたいと感じた。

